

ヨーロッパの医史学の現況について

石田 純郎

はじめに

一九九〇年五月から一九九一年八月までの一年四ヵ月間、オランダ・ライデン大学の形而上医学部門・医史学教室に留学した。日蘭医学交流史の研究をするとともに、いくつかの国際的な医史学会、オランダ国内の研究会にも参加した。また積極的にヨーロッパ内の医史学関係博物館、公文書館、図書館、歴史のある大学、大学の医史学研究所、医史跡を訪れ、その数は十四ヵ国、六十都市、一八〇施設に及んだ。訪れた国は、イタリア、フランス、スイス、オーストリア、ドイツ、オランダ、ベルギー、ルクセンブルグ、イギリス、アイルランド、デンマーク、ノールウェイ、スウェーデン、フィンランドにのぼる。三ヵ月間にこれだけの国を廻ったわけで、短い国の滞在期間はずか一日間という例もあり、必ずしも精度の高い情報とばかりは言いきれないが、ヨーロッパの医史学事情の一端を、ここに報告したい。

これらの国の中では、オランダとドイツそしてこれを含むゲルマン圏での滞在が比較的長かった。ヨーロッパ全体を概観した後、これらの国を中心に医史学研究所、医史学博物館について述べ、そして最後に日本の医史学界へのヨーロッパの医史学者のコメント、ヨーロッパの医史跡を訪れる時の実際的なアプローチの方法論について述べたい。

ヨーロッパの概観

ヨーロッパには主要な国際的医史学会が二つ存在する。その一つは International Society for the History of Medicine (国際医史学会) で、もう一つは European Association of Medical Historians (ヨーロッパ医史学者連合) である。後者は、歴史を持つ前者の低レベル化、老人サロン化に不満を持った若手研究者が造反し、医史学の専門化・高度化を求め、今年旗上げた新しい学会である。

国際医史学会に所属するヨーロッパの会員数は、左記のとおりである(一九八七年十月一日現在)。

ギリシア二八、イタリア六六、ポルトガル七、スペイン二一、フランス八三、スイス九、オーストリア二、ドイツ(旧東)三、(旧西)三二、オランダ一八、ベルギー四二、ルクセンブルグ〇、イギリス四三、アイルランド六、デンマーク一、スウェーデン六、ノールウェイ一、フィンランド七である。ちなみに日本は二で、故本間邦則氏と中沢修氏である。会員数では、ギリシア、イタリア、フランス、ドイツ、オランダ、ベルギー、イギリスが多い。立派な研究室や博物館のあるオーストリア、デンマークで会員数の少ないのは、意外な気がする。

ヨーロッパ医史学者連合は、ドイツのゲッチンゲン大学のトレーラー教授ら、ドイツ、デンマーク、オランダの若手研究者が結成した^(一)。そのため、会員はドイツを中心とするゲルマン圏の人が多く、ラテン系のスペイン、フランス人は極めて少なく、またイギリス人も少ない。

オランダの現況

オランダには、三つのグループの医史学研究者がいる。^(二)

一つはライデン大学系のグループである。ライデン大学は医学部形而上医学部門 (Metamedica, 医学哲学、医学倫理、医史

学の三部門で構成)の中に医史学教室がある。主任教授はハルム・ボイケルス (Harm Beukers) 教授で、リューエンダイク教授(女性)の後継者である。研究室は、教授、非常勤講師(ケルクホック博士——ライデン保健所長)、秘書、客員教授(一九八九年~九〇年 ハロルドコック 米ウィスコンシン大教授、一九九〇~九一年 筆者)、研究生(数名——比較的年長者が多い)、解剖学博物館学芸員で構成される。

ボイケルス教授の専門は、ライデンの医学史と日蘭医学交流史である。訪日もすでに数度に及び、焼酎と焼鳥をたしなむ親日派である。研究生は学位論文を作製し、そのために医史学の基礎的研究が着実に行なわれている。東京学芸大学出身(大沢真澄教授門下)の塚原東吾は、研究生として、「化学の江戸時代の日本への受容」についての博士論文を準備中である。この研究室からは、着眼点の良し、ヒネリをきかせた小論文がよく出る。

関連施設としては、ライデン大学解剖学博物館、ブルルハーブエ博物館、ライデン大学図書館などがある。解剖学博物館は週日の日中(予約制)開館し、人体解剖模型、奇形標本、血管標本、医療器具、肖像画などを展示する。ライデン大学医史学研究室は、一時途絶していた時期があり、そのため古医書は、ブルルハーブエ博物館とライデン大学中央図書館に分けられて所蔵されており、その点若干不便である。一六三六年に、オランダで初めて医学生に対しベッドサイドティーチングが行なわれた旧聖セシリア病院の建物に、一九九一年春にブルルハーブエ博物館が新装オープンした。オランダ最大の科学史医学史博物館で、展示品は科学器具、医学器具、顕微鏡、薬剤器具、キョンストレーキ、肖像画、博物標本などである。展示の目玉は、一八世紀末に完成し、一九世紀はじめに取り壊された、ライデンの解剖講堂の実物大の再現展示である。図書室は、豊富なオランダの古医書を蔵する。ライデン大学中央図書館には、オランダの古医書や、シーボルトを含むオランダ医の持帰った日本の古医書や史料を蔵する。

シーボルト関係の史料は、それ以外に国立民族学博物館、植物標本館、自然史博物館、ライデン大学植物園などにも収蔵・展示されている。

オランダの医史学の第二のグループは、リーブルフ (M. J. van Lieburg) 教授を中心としたグループである。彼はリンデブーム教授の弟子で、アムステルダムフリー大学と、ロッテルダム大学の両大学の教授を兼任している。彼の学位論文は、ロッテルダムのクールシンゲル病院の歴史についてである。研究方法は、ボイケルス教授と対照的で、システムティックである。彼のコンピューターには、無名のオランダ人医師のデータがたまっている。また社会的な医史学も得意な分野である。アムステルダムフリー大学でも、ロッテルダム大学でも、講座は教授と秘書、研究生だけからなる不完全講座である。学位はやはり取得可能である。

第三のグループはナイメヘン大学のグループである。ド・ムーラン前教授の健在なころは、スタンダードな論述が、この研究室より次々と出されていた。彼は一九九〇年に引退、現在まで後任は選出されず、助手のファン・ヘテレン (van Heteren) が細々と医史学研究を続けている。しかし近日中に、某氏が教授に就任されるだろうという。しかしながら、この人の専門は医史学より医学倫理に近いという。

オランダの医学関係の博物館は左記のようなものがある。詳しくは『日本医事新報』に連載中の拙著「ヨーロッパ医史跡散歩」をごらんいただきたい。

・アムステルダム

国立博物館…日蘭交渉史、中世・前期近代の医療職の風俗画など。

歴史博物館…中世・前期近代の医療職の風俗画、薬局関係史料など。建物が旧孤児院。

海事博物館…図書室に幕末維新期に渡蘭した日本人の写真・資料などが蔵されている。日蘭交渉史の展示がある。

アムステルダム大学図書館…オランダきっての古医書を所蔵する。パスポートがあれば、誰でも古医書の閲覧可能。

・グローニンゲン

グローニンゲン大学博物館…医学・科学器具、大学史料、キュンストレーキなど。

船とタバコ博物館・オランダ商船と長崎の展示。

大学本館・理事室に來日したブラッハ、エイクマン教授の肖像画。

・デン・ヘルダー

海軍博物館・下関戦争関係史料。

・ハールレム

フランスハルス博物館・医学コレギウム資料、病院理事 (Regent) の集団肖像画を展示、建物が旧養老院。

ハールレム市資料館・フランスハルス博物館の向い。建物が旧病院。

テラー博物館・科学器具など。

・ライデン (本文記載以外の施設)

市立博物館 (Lakenhof) : 外科医の集会室の再現。ターヘルアナトミアの蘭訳者ディクテンの資料など。

・ウトレヒト

ウトレヒト陸軍軍医学校跡・近日中に取り壊される予定。

ウトレヒト大学本館・旧い大学の雰囲気を残す。理事室に教授の肖像画。

大学博物館・科学器具、ドンデルス史料、J・K・ファンデンブルック史料。

眼科史料室・ドンデルス関係史料、土木技師エッセルによる一八七六年の福井県三国町のスケッチ(筆者発見、指摘)。

・ハーグ

マウリトハウス王立美術館・チュルプ博士の解剖学講義(レンブラント画)をはじめ、中世、前期近代の医療職の風俗

画。

・デルフト

医史学博物館…一九九一年に開館。一九世紀の医療器具など。

・ゴード

セントカタリナガストハウス博物館…古い教会病院跡にある歴史博物館。外科ギルドの集会室と薬局が再現。

・ロットテルダム

ポイマンズ美術館…中世、前期近代の医療職の風俗画。

・古書店事情

イスラエル（アムステルダム）…豊富な古典のコレクションを持つが、価格が高い。

テオ・デ・ブァー（ツボレ）…東京の井上書店の価格を参考に、ここ二年で値段が三倍になった。

スレヒテ・オランダ・北ベルギーに二〇軒を数える新古本・中古本の大型チェーン店。値段はリーズナブルであるが、医史学関係の本の種数が最近減ってきて、残念である。

ベルギーの現況

アントワープ大学、ブリュッセル大学、ルーバン大学に医史学研究室がある。

主要博物館

・ルーバン

ルーバン大学医史学博物館…市の観光案内所も把握しておらず、訪問出来なかった。

・ブルユージュ

メモリンク博物館（聖ヤンスホスピタル）…修道院病院の原形をよく残す。（日経メディカル一九九一年六月二五日号参照）。

・トゥルネイ

民族博物館・田舎の博物館の二階の一角に医史学コーナーがある。

・ブリュッセル

美術史博物館・ローマ時代の医療器具セットなど。

古典美術館・中世・前期近代の医療職の風俗画など。

・アントワープ

印刷博物館・ワルメイダの解剖書の扇絵（『解体新書』の扇絵に使われたもの）の銅版など。

ドイツの現況

ドイツでは医史学研究は大変盛んである。医史学は医学部の必修科目であるし、また医学博士号の取得も可能である。基礎的な研究も多いし、医史学書も豊富に刊行されている。

ドイツの主要な医史学研究施設、教授名、及び専門分野を記す⁽⁴⁾（旧西ドイツ地域のみ）。

・アアヘン工科大学医学部医史学

A. H. Murken 教授・病院史、芸術と医学、一九世紀、小児のための医学書。

・ベルリン自由大学医史学

R. Winau 主任教授：biologism（生物学主義）の歴史、ナチズム時代の医学、ベルリン医学史、医学倫理。

G. Baader 教授：古代・中世医学史、ナチズム時代の医学。

J. Bleker 教授（女性）：臨床医学史、臨床教育史、公衆衛生史。

G. Jütner 教授：薬学史。

・ボクム大学医史学

- I. Müller 教授：中世の医学と植物学、海軍医学史、一九世紀植物学史。
- ・ボン大学医史学
- H. Schott 教授：精神医学史、精神療法、精神療法、治療の伝統的考え方、ゲーテ時代の医学。
- ・デュッセルドルフ大学医史学
- 現在空席（前教授 H. Schadevaldt：海軍医史）。
- ・エルランゲン・ニュールンベルグの大学医史学
- R. Witten 教授：古代史、ホメオパシー、精神医学史。
- ・フランクフルト大学
- G. Preiser 主任教授：古代医学、フランクフルト大学史、医学倫理。
- H. Siefert 教授：精神医学史、精神療法史、ナチズム時代の医学、医学倫理。
- O. Winkelmann 教授：外科史、泌尿器科史、医学倫理、ベルリン医学史、一九世紀、二〇世紀。
- ・フライブルグ大学医史学
- E. Seidler 教授：小児科学史、一八、一九世紀の医学の社会史、ナチズム時代の医学、医学倫理。
- ・ギーゼン大学医史学
- J. Benedum 教授：医学用語、ギリシア、ローマ医学、外科学史、物療、医学と芸術、神経解剖学、職業病、ギーゼン大学史。
- ・ゲッティンゲン大学史。
- U. Tröhler 教授：医学統計史、外科史、動物実験及びその反対運動、医学教育、医学倫理、ゲッティンゲン大学史。
- ・ハンブルグ大学医史学

U. Weisser 教授：中世におけるアラブ、イスラム医学。

・ハノーバー大学医史学

W. U. Eckart 教授：一六世紀、一七世紀、ヨーロッパ植民地主義時代の医学、医学行動主義 (medical behaviorism)、宗教伝道と医学。

・ハイデルベルグ大学医史学

現在空席

・リューベック大学医史学

D. von Engelhardt 教授：文学の中の医学、ロマン派医学、医学社会学。

・マインツ大学医史学

W. F. Kümmel 主任教授：健康教育史、ユダヤ人医学、医学の中の反ユダヤ運動、前期近代の大学卒内科医の患者、医学の進歩のための信念の由来。

Klaus-Dietrich Fischer 教授：古代、中世、前期近代の医学（歯科学と獣医学を含む）、医学語義学。

G. Mann 教授：近代医学と生物学。

・シュンヘン大学医史学

P. U. Unschuld 主任教授：中欧比較医学史。

J. Willmanns 教授：西洋古典の中の医学、一九世紀。

・シホンゲン工科大学医史学

G. Pfohl 主任教授：ギリシア医学、疾病史、人間性の学説の研究、医学における偽科学の存在、麻醉学史、婦人科史、眼科史、下顎手術。

C. Probst 教授：古代、中世、一八・一九世紀。

・ミュンスター大学医史学

R. Toellner 主任教授：ルネッサンス期・啓蒙期の医学、医学倫理。

K. Sadegh-Zadeh 教授：医学哲学、医学倫理。

・スタットガルト大学医史学

現在空席。

・チュービンゲン大学医史学

G. Fichtner 主任教授：医学教育史、医学倫理、精神医学、精神療法。

D. Golz 教授：胎生学史・四体液説。

・ヴェルツブルグ大学医史学

G. Keil 教授：ゲルマンと北欧の中世医学史、レントゲン。

・ケルン大学医史学

D. Jetter 教授：病院史。

筆者は、この中でゲッティンゲン大学、ヴェルツブルグ大学、ベルリン自由大学、ケルン大学に短期間、滞在研究し、またハノーバー大学、ミュンヘン大学を訪問した。ドイツ人の日本人好きという国民性のため、ドイツではふつう暖かいもてなしを受ける。

主な博物館としては、

・ハイデルベルグ

ドイツ薬博物館：修道院病院薬局の復元。質の高い展示。中規模。

ハイデルベルグ大学図書館・古典收藏。

・インゴルスタッド

医史学博物館・インゴルスタッドは、ミュンヘン大学発祥の地。中規模な博物館。

・ミュンヘン

ドイツ博物館（科学博物館）・巨大な科学技術博物館。光学、眼科器具の展示あり。

・スタットガルト

ホメオパシー研究所・ホメオパシー（類似療法）の歴史、パラケルススに関する一次史料の收藏。

・レムゴ

レムゴ博物館・ケンペル展示室あり。

オーストリアの現況

かつてウィーン陸軍軍医学校が置かれたヨセフィウムという建物の中に、ウィーン大学医史学教室と、医史学博物館がある。H. Wylkicky 教授と、数人のスタッフががいる。医史学博物館は、系統的展示で解り易い。豊富な古医書を蔵する利用しやすい図書室もある。筆者はこの大学にも一週間滞在した。

北欧の現況

スカンジナビア医史学会は、フィンランド、デンマーク、ノールウェイ、アイスランド、スウェーデンの五カ国に、二十三支部、五〇〇〇名もの会員を擁する。^(五七)事務局長は、スウェーデンの Göteborg の医史学博物館長の Inger Wikström-Haugen がとめる。彼女はおしゃれなスウェーデン美人である。専門は、一般の歴史学。同博物館は、一般市民に向け

ての啓蒙的展示が多いが、看護史コーナーは充実している。スウェーデンにはここ以外に、 Lund とストックホルムに医学史博物館があるが、筆者は未見である。ウプサラには、ツンベルグとの関連で見残せない史跡が多い。それは、グスタヴィアヌムの中の解剖講堂、多くの記念物を有する大学本館、ツンベルグの手稿を含む古典を蔵する図書館、リンネの植物園、リンネ博物館、そして大学史を展示するウプサラ博物館などである。詳しくは拙著別稿を参照いただきたい。

フィンランドではヘルシンキ大学に医学史研究所があり、医学史博物館が付設されている。小規模な博物館である。学芸員の H. Strandberg は、国際学会でよく発表し、気さくな人柄である。

デンマークには三医大しかないが、コペンハーゲン大学に医学研究室がおかれ、医学史博物館を持つ。主任教授は外科医出身の B. I. Lindskov であり、第一回ヨーロッパ医学者連合の大会は一九九一年六月にこの大学で開かれた。博物館はかなり大規模で、かつ展示の質が良い。またデンマークでは、Århus 大学にも医学史博物館がある。

ノールウェイでは、ベルゲンにレブラ博物館が、オスロにくすり博物館があるが、筆者は未見である。

スイスの現況

スイスには左記の博物館がある。

・バーゼル

薬史博物館…大学薬学部に付設する中規模な博物館。復元薬局などの質の良い展示がある。

解剖学博物館…日曜の午前中のみの開館で、筆者は未見である。

・チューリッヒ

医学史博物館…チューリッヒ大学の付属で、最近独立した建物に移転した。中規模ではあるが、質の良い展示がある。

イタリアの現況

筆者の訪れたイタリア北部の主要施設は左記のとおりである。

・ボロニア

ボロニア大学旧本部(アルギジナージ宮殿)・一〇八八年に創設された最古の大学の一つであるボロニア大学は、十六世紀にこの建物に集められた。この中にある一七世紀に建てられた解剖講堂は、芸術的でもあり、必見の遺跡である。一九四四年に野蛮人(パンフレットの表現のまま)の空襲により大破したが、戦後再建された。

大学本館・大学本館には自由に入れる。ここそこに前期近代のメモリアルがある。この建物の中に産科学史博物館があり、妊娠子宮のワックス、粘土、キュントレーキモデルや産科器具が展示されている。またこれ以外にこの大学は、各研究室が博物館・展示室をもっており、予約なしでも週日の午前中なら、ふつうイタリア人のホスピタルティで見学させてくれる。しかし財政的裏付けがないため、一部の博物館は悲惨な状態である。それらは病理解剖学博物館・正常解剖学博物館・獣医学病理学博物館・比較解剖学博物館である。

この中では、比較解剖学博物館は、博物館としての体裁をととのえている。また正常解剖学博物館のワックスモデルは、妙になまめかしく美しい。

・パドバ

大学本館(イル・ポル・ト牛館の意味)・一二世紀に創設されたこの大学は、一六世紀にこの建物へ集められた。この大学由来の解剖講堂、植物園、ベッドサイドティーチングがオランダのライデン大学へ大きな影響を与えたことは、忘れてはならない。一五九四年に作られた解剖講堂が現存する。ガリレオの部屋、大学史資料室も隣接する。^(九)

・フロレンス

ワックスマodel博物館・解剖ワックスマodelを多数展示する。

科学史博物館・残念なことに、現在財政難のため、医史学部門は閉鎖中である。

・パピア

大学本館・大学博物館・前期近代のメモリアルをたくさん残す大学博物館の中に大学本館がある。医学教授についての豊富な展示がある。スカルパの首が展示されているのも有名である。^(七)

フランスの現況

・パリ

パリはウィーン、ロンドンとならんで不愉快な町である。人々は不親切で、博物館は規定通り開かない。その上、図書館は官僚的で古文書を見るのが難しい。パリの主要な医史跡としては、

パリ病院博物館・中規模なこじんまりした医史学博物館。

パスツール研究所博物館・小規模な博物館で、パスツールの遺品を展示。

オテル デュエー・現在も生きている歴史ある大病院。まるで教会のようである。

パリについては、ザイドラー原著、大塚恭男訳の『医史学の旅、第一巻パリ』という良いガイドブックが出ている。

・モンペリエ

大学医学部・モンペリエ大学も中世までさかされる古い大学である。建物が教会と完全に一体化しているのが特徴である。内部に多数のメモリアルがある。

解剖学博物館・大規模な医学史博物館である。整理は悪いが、コレクションの量はかなりのものである。医学の全分野の収集品を展示する。

・リヨン

オテル デュール…病院博物館。中規模で質の良い病歴史の博物館。

・ボース (Beaune)

オテル デュール…一四四三年創設の病院を博物館として保存。ヨーロッパ最高の病院博物館である。

イギリス・アイルランドの現況

イギリスでは、ロンドンにウエルカム医史学研究所があり、重要な機能を果たしている。ロンドンについては、酒井シヅが一九九〇年に『科学医学資料研究』で詳しく述べているので、ここでは簡単に述べるにとどめる。

ロンドンの科学博物館4階と5階の全フロアーが「ウエルカム博物館」になっている。大規模な質の良い展示があり、ヨーロッパ随一の医史学の博物館と言ってもよい。^(三)

・オックスフォード

科学史博物館…科学器具、顕微鏡を展示する中規模な博物館。

オックスフォード博物館…大学史の展示がある。

・エジンバラ

大学本部…リスターの遺品を展示した部屋がある。

外科史博物館…ロイヤル・カレッジ・オブ サージャンズの付属施設である。一九八九年開館の新しい博物館であるが、外科医の身分の変遷について上手に説明している。

ロイヤル カレッジ・オブ・フィジシャンズ エジンバラ…中には華麗なメモリアルが無数にある。

エジンバラ・ロイヤル・ソサエティ…やはり内部に有名科学者の肖像画、胸像、レリーフなどが多数ある。

ヤング シンブリン 資料室…社会施設の中の一室が、麻酔資料室として保存されている。

・ダブリン

ロイヤル カレッジ オブ フィジシャンズ アイルランド…中に多数の内科医のメモリアルがある。古医書を蔵する美しい図書室がある。

ロイヤル カレッジ オブ サージヤンズ アイルランド…歴史的に貴重な図書室がある。

王立病院 キルマインハム (Kilmainham)…現在はモダンアートの美術館であるが、一七世紀の病院の建物が利用されている。病院、教会、大きな窓などに注目すべきである。

日本の医史学界へのコメント

従来、欧文の日本医学史書の刊行が少なかったこともあり、ヨーロッパ医史学者の日本医学史への関心は、余り大きくないようである。

ドイツとオランダの某教授から、日本医学史学会へ問合せの手紙を書いたのに、全く返事がなかったと、文句を言われた。公的機関への問合せに対し、返答がないのは、ヨーロッパでは非常識なことである。

日本で開かれている谷口財団国際シンポジウムは、すでに十五回を数え、相当数のヨーロッパ人医史学者が参加している。彼等の感想は、「食事のうまいシンポジウム」であるというところで、何人もの学者からこの意見は聞いた。その一方で、このシンポジウムの講演集は、配布方法が極めて悪いようで、全巻そろっている図書室を見たことがない。たいがい当人の参加した会、前後の一〜二冊のみである。単にお金を使っておいしい食事を供するだけでなく、もう少しヨーロッパ人研究者に学問上のインパクトを与えるシンポジウムを目指す必要があろうし、また講演集の販売方法も改善する必要があろう。

実際の歩き方

今年五月の連休に、ある医史学会員を案内役に、オランダの医史跡を見学するというツアーが催された。ある意味ではこのツアーのやり方は、我々日本人が犯しがちな、まずいやり方に満ちていたので、反面教師として、どういふ点がまずいのか、どうすれば良いのかという点を、このツアーを例にして具体的に述べたい。

このオランダの医史跡めぐりは、あるオランダの旅行社へ委託された。そして、その実際的なプランの作製のために、案内役の医史学会員の知人で、長年オランダに在住する日本人に、アドバイスが求められた。ところがこの人は医史学の専門家でも、歴史の専門家でもなかった。本人も門外漢の仕事を持ち込まれて迷惑だった、と言っている。後になってポイケルス教授にプランが示されたが、彼は、「奇妙なプランなので驚いた」と言う。オランダの旅行社自体も良くなかった。月曜休館が常識の博物館に、月曜日に行くことになっていたり、コースが順路でなく無駄が多かったりした。

また半年前の参加者募集時のパンフレットに示されていた、ある大病院への訪問許可の仲介がポイケルス教授にあったのは、一行の到着わずか三週間前であった。ポイケルス教授は怒っていた。このような直前の依頼は、この国では断られるのが常識である。こんなことも日本側企画者サイドには解っていない様子であった。

従って医史跡巡りをする時には、ぜひ見たいものには、三ヵ月位前には依頼や問合せをし、一ヵ月位前には返事をもらっておく必要がある。(五月／八月のバカンスシーズンは、係員のバカンスのため閉館が多い。)現地で情報を得る人も、旧知の日本人ということだけでなく、その道の専門家を選ばなければならない。そしてこのツアーのように、質の悪い旅行社にひっかかってはならない。

国によっても、かなり対応がちがう。親切、柔軟な対応の国と、官僚的、不愉快な国がある。前記の注意は、平均的なオランダレベルのものであり、ドイツは対日感情が良いだけ、もう少し良い。大変良い国は、イタリア、スウェーデン、

スコットランド、アイルランドで、これらの国では、予約なしでもどうにかなることが多い。逆に悪いのは、ウィーン、パリ、スイスで、これらの国(地域)では開館を確認して施設を訪ねても、行ってみるとそれが、閉まっていることすらある。係員が勝手に休んでしまうのである。

おわりに

典拠資料のちがいから、地域によって研究施設単位で述べたり、博物館単位で述べたり、終始一貫しないエッセイになつてしまつたが御容赦いただきたい。^(八) 会員の皆様がヨーロッパに問合せたり、医史跡紀行をする際の、ヒントになれば幸いである。

文献及び註

- (一) 石田純郎「ヨーロッパ医史学者連合の誕生」『医譚』復刊六一号、一九九一(平成三年)に掲載見込。
- (二) オランダの医史学会については、下記拙論文参照。石田純郎「オランダの医史学会について」『医譚』復刊五九号、三八〇〜三九頁、一九九〇(平成二年)。
- (三) 一九九一年七月より筆者は『日本医事新報』に「ヨーロッパ医史跡散歩」を、不定期三〇回の予定で連載中である。また既に上記の記事を発表した。石田純郎「ロマンチック街道に今も残る小病院」「質量とも西洋随一、ウエルカム医学史博物館」「中には慈善施設 聖ヤンスホスピタル内、メムリンク博物館」「オランダ最古の大学の二つの由緒ある博物館」。いずれも『日経メディカル』六月二五日臨時増刊号・医と文化、一九九一(平成三年)。
- (四) 左記記事を抄訳の上、追記した。
Tröhler, U: Graduate education in the history of medicine: Federal Republic of Germany. Bull. Hist. Med. 63 : 435-443, 1989.
- (五) 左記記事を抄訳の上、追加した。

Wikström-Haugen, I: Scandinavia, Medical History Museum in Scandinavia: Bulletin of European Association of Museum of the History of Medical Sciences, Nr 12: 2-4, 1990.

(六) 石田純郎「ツンベルグ ウブサラ紀行」『医譚』復刊六〇号、四三〜四七頁、一九九一(平成三年)。

(七) 原田康夫「イタリア・パビア大学の解剖医たち」『日本医史学雑誌』三二巻二号、一五八〜一六〇頁、一九八六(昭和六十一年)に詳しい。

(八) この分野では、すでに下記の報告がある。鹿子木敏範「ヨーロッパ特にドイツの医史学教育と研究の現況」『日本医事新報』三〇二二号、一三八〜一三九頁、一九八二(昭和五十七年)。筆者がこのエッセイを書くにあたっては、あえて鹿子木の報告を参考にしなかったが、鹿子木の報告もまた有益な情報を含む。

(九) 石田純郎「革新の医学教育の流れ―ベッドサイドティーチング、解剖講堂そして植物園―」『医譚』復刊六〇号、一九〜二六頁、一九九一(平成三年)。

終りに、この報告の執筆に当り、ライデンの Alion 財団から援助を受けたことを付記する。また資料提供していただいた H. Beukers 教授、U. Tröhler 教授及び I. Wikström-Haugen 氏に感謝する。

(前ライデン大学医史学客員教授
公立新見女子短大教授)